

豊橋市美術博物館友の会だより

2017年 Vol.99
FU風伯HAKU



展覧会紹介

ニッポンの写実 ~そっくりの魔力~

11月12日(日)まで開催

※月曜日休館 豊橋市美術博物館 1階展示室

※「豊橋まつり」のため、10月21・22日は駐車場が利用できません

※金・土・日・祝は午後7時まで夜間閉館



上田 薫《なま玉子》1978年 高松市美術館蔵

写真の発明以来、美術は現実の事象をそのままに写し取ろうとする写実技法から離れ、その反動から多様な表現手段が展開されました。しかし、写実を志向する熱情は絶えてしまったわけではありません。たとえば、大正期の草土社をはじめとするひたむきな写実への探求、近年注目をあつめている明治期の工芸作品にみる超絶技巧など、時代ごと、ジャンルごとに様々な形で浮上してきました。また、1970年代にはスーパー・リアリズム（フォト・リアリズム）が到来し、強いインパクトを与えるとともに視覚のリアルとは何かを問う機会となります。以後、上田薫・三尾公三など、写真的リアルを追求した画家があらわれる一方で、いま一度人間の視覚に立ち戻り、観察と技法を基盤に存在に迫ろうとする野田弘志や磯江毅、諏訪敦などの迫真的写実描写に高い関心が寄せられています。

本展覧会では、油彩画・日本画・鉛筆画といった平面作品のみならず、安藤緑山・山崎南海ら明治大正期の工芸作品や須田悦弘・前原冬樹と

いった現代作家の立体造形、さらには佐藤雅晴や伊藤隆介の映像を用いた作品まで、多種多様な「そっくり」をめぐる作品を集めました。

そのため、これらを通常の時代表順・作家別に示すのではなく、「親しきものへのまなざし」「生と死を見つめて」「存在をみいだす」「世界を写す～写真からの啓示」の4章により、モチーフやテーマごとに新旧の作品を比較しながら、超絶の写技をお楽しみいただきたいと思います。写しとることへの尽きることのない探求と、写実表現を手段として展開する新たな境地をぜひご覧ください。

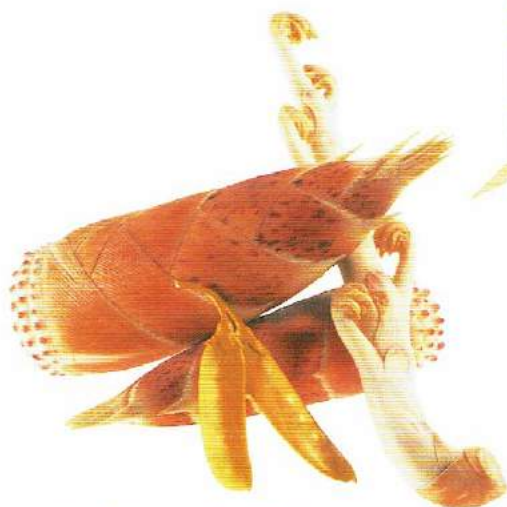
(主任学芸員 丸地加奈子)



磯江 毅《鯛》2007年 個人蔵

近年、その超絶技巧で注目を集めている安藤緑山。本物そっくりなこの野菜は、何と象牙でできています。竹の子の皮のうぶ毛さえも再現するその技巧は一見の価値あり。柿や貝を主題にした緑山作品もぜひご覧ください。

スペインで写実絵画を学び、グスタボインソエと称して活躍した磯江毅。鉛筆で丹念に描かれたこの《鯛》は惜しまれながら53歳で亡くなった画家の最後の完成作品として知られています。



安藤緑山《牙彫 竹の子、豌豆、独活》大正時代 清水三年坂美術館蔵

会期中は金・土・日・祝日の夜間閉館を行っています。秋の夜長は美術博物館でゆっくり過ごしませんか？

★金曜イブニングツアー★

金曜の夜、担当学芸員が作品解説を行います
10月27日、11月10日 午後5時30分～

☆ギャラリートーク☆

通常時間のトークはこちらへ
10月29日(日)、11月4日(土) 午後2時～

～東海地方の土偶が大集結!～ 東海大土偶展

11月3日(祝)～12月24日(日) 月曜日休館 豊橋市美術博物館 2階第1展示室

※11月3～5、10～12日は午後7時まで夜間開館

縄文時代の土人形、それが土偶です。土偶には、縄文人の祈りや思いが込められていると考えられています。その祈りや思いは何だったのか? そんな「謎」やユニークな姿が、土偶の魅力でもあります。



①

この展示では、東海地方の土偶が初めて勢ぞろいします。ほかにも、東北地方の遮光器土偶や中部地方の土偶付の土器、新潟地方の火焰土器など、各地の有名な土偶と縄文土器を集めました。フリーライターとして活躍中の譽田亜紀子さん協力

の下、土偶のユニークな姿にスポットを当て、その魅力を紹介します。また、戦後、明治大学考古学研究室の発掘調査により土偶が出土した大蚊里貝塚などの出土品から、東三河地方の縄文遺跡が考古学に果たした役割を振り返ります。

(学芸員 村上 昇)

◆とよはし歴史座「土偶を語ろう」

11月11日(土) 午後2時～(講義室にて)

「顔のない土偶」伊藤正人(名古屋市教育委員会)

「土偶を語ろう」譽田亜紀子(土偶女子・フリーライター)

との対談

◆学芸員によるギャラリートーク

11月18日(土) 午前10時30分～、午後2時～

◆文化財サポーターによる展示解説

期間中、希望者向けに随時行います

①《麻生田大橋遺跡出土の男女の土偶》豊川市教育委員会蔵

豊橋の寺子屋展

11月3日(祝)～12月3日(日) 月曜日休館 豊橋市美術博物館 2階第2～4展示室

※11月3～5、10～12日は午後7時まで夜間開館

藩士が藩校で文武の教育を受けたのに対して、江戸時代後期から明治の初めに数多くの寺子屋が設立されて、庶民はそこで俗に言う「読み書



②

きそろばん」を学習しました。その様子が渡辺華山《一掃百態図》にいきいきと写し取られていることはよく知られています。羽田村の浄慈院では文化年間から明治6年まで寺子屋を運営していました。

同寺には、子どもたちが学んだ往来物や学問の神様である天神に奉納した習字などの資料が残っています。明治初めの学制発布によって寺子屋は廃止され、地域に学校が設置されますが、その頃の初等教育で使用された教科書なども紹介します。

(学芸専門員 増山真一郎)

◆講演会「寺子屋と学校」

11月12日(日) 午後2時～

「多聞山日別雑記と寺子屋」山澄和彦(浄慈院住職)

「寺子屋と明治初期の学校」山下廉太郎(朝日大学准教授)

◆学芸員によるギャラリートーク

11月18日(土)、12月3日(日) 各午後2時～

②渡辺華山《一掃百態図》文政元年(1818) 田原市博物館蔵 重要文化財

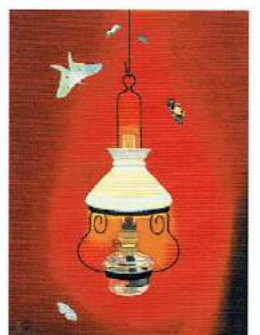
収蔵品展 生誕100年 森緑翠と白士会

平成30年1月30日(火)～3月4日(日) 月曜日休館

豊橋市美術博物館 2階全展示室

東京に生まれ豊橋で後半生を過ごした森緑翠は、穏やかな人柄を反映した清廉な画風で知られています。このたび生誕100年を記念し、緑翠の代表作を下絵を交えて展観するとともに、緑翠の師である中村岳陵とその画塾〈蒼野社〉同人、当地で活躍した〈白士会〉創立メンバーの作品を紹介します。

(燈)1974年



展覧会紹介(二川宿本陣資料館)

岡山藩主池田家と吉田・二川

10月7日(土)～11月19日(日) 豊橋市二川宿本陣資料館

月曜休館(ただし10月9日(月・祝)は開館し、10月10日(火)が休館)

天正18年(1590)、天下統一を果たした豊臣秀吉により、徳川家康が関東へ移封されると、吉田城には池田照政(後に輝政)が入り、東三河4郡など15万2千石を領しました。

照政は吉田城の大規模な改修を行うなど、近世吉田の礎を築きましたが、慶長5年(1600)には関ヶ原の戦い後の論功行賞によって播磨姫路52万石へ転じました。その後、輝政の嫡男利隆の子孫は備前岡山31万5千石の藩主になりました。歴代藩主の中でも、輝政の曾孫である綱政は岩屋観音に深く帰依し、絵



①

馬や経典などを寄進しました。その他の藩主たちも、参勤交代の道中で岩屋観音へ参詣することがありました。

この展覧会では、池田輝政・綱政の二人を中心に関連資料を展示し、備前岡山藩主池田家と吉田・二川との関わりを紹介します。織田信長の「天下布武」の朱印状をはじめ、輝政と同時代を生きた天下人たちの書状、大岩寺に伝わる綱政ゆかりの文化財などを一堂に展示します。



②

(学芸員 久住祐一郎)

◆記念講演会「池田家と女性たち」倉地克直(岡山大学特命教授) 定員:50名(申込順)

10月21日(土) 午後1時30分～ 申込:二川宿本陣資料館 0532-41-8580

◆学芸員によるギャラリートーク ※事前申し込み不要

10月15日(日)、25日(水)、11月4日(土) 各午後2時～

①(梨子地泊蝶紋鞍(池田輝政所用)) 林原美術館蔵 ②(繪馬) 大岩寺蔵

田原市博物館所蔵浮世絵名品展

初日 12月2日(土)～千秋楽 平成30年1月14日(日) 豊橋市二川宿本陣資料館

月曜、12月29日(金)～1月1日(月・祝)は休館(ただし、1月8日(月・祝)開館、1月9日(火)休館)

田原市博物館は、郷土の偉人渡辺崋山の生誕200年を記念し、崋山の関係資料と田原藩資料などの文化財を保存、展示するため平成5年に開館しました。以来、崋山関係の企画展開催、資料収集活動等を行う中で、陶磁器・鏝などの工芸品・浮世絵などからなる芝村義邦コレクションを所蔵していることでも知られています。教員であった芝村氏は旧制成章中学校(現成章高等学校)が最初の赴任先であり、後に時習館高等学校などの校長を歴任されました。



③ 本展覧会では、この芝村

義邦コレクションの浮世絵の中から相撲絵にテーマを絞り、花形力士の土俵入り、取組、稽古の様子などの作品を紹介します。挿図の《雲龍久吉横綱土俵入の図》をご覧ください。現在も「雲龍型」の横綱土俵入りなどその名は広く知られています。よく見ると土俵の様子が今とは違います。俵が二重になっています。こうした「江戸時代の相撲」をぜひ発見していただき、今後の大相撲観戦などの際に、違った角度からお楽しみいただければと思います。この機会にぜひ二川宿本陣資料館へお出かけください。

(主任学芸員 高橋洋充)

◆学芸員によるギャラリートーク ※事前申し込み不要

12月10日(日)、20日(水) 各午後2時～

③歌川国貞(二代)《雲龍久吉 横綱土俵入の図》

星野眞吾賞展と私の作品の「特殊性」について

財田翔悟(第7回星野眞吾賞受賞)

「これは日本画なのですか?」

私の作品を見ていただいた方からよく言われる言葉の中にこのようなものがあります。もっともなご意見だと思っています。それだけ私の作品は既存の日本画からすると「特殊」であることは自他ともに認めるところだからです。

今回の作品に限らず、私の作品には様々な素材、技法を積極的に取り入れています。日本画の代表的な素材、岩絵具はもちろん、洋画材である絵画用石膏や化学顔料を使用し、漆技法の一部を取り入れ下地に光沢を出し、画面の中で質の変化を生んでいます。また、構図に関しても女性が鑑賞者を見つめる様子は西洋の肖像画のような趣を感じさせるところがあるかと思います。確かに見た目だけでは「日本画」とは程遠い作品かもしれません。

しかしながら、洋画に対抗する必要性もなくなり、日本画の定義が曖昧になって久しい現在、制作する側としては日本画の定義がかなりの広範囲に及んでいることが当たり前となっています。それぞれがそれぞれに日本画に対しての意味を見出さなくてはならないことは、ある意味では日本画に関わりを持つ時点で誰しものが持たなくてはならない呪縛ともいえるかもしれません。それでもなお「日本画」の幻影を追う公募展が多い中、星野眞吾賞展は日本画において「特殊」な公募展であり、日本画にとって非常に重要な意味を持っていると私は確信しています。

今までの入賞、入選作品の日本画の枠にとどまらない、絵画の可能性を期待させるバラエティの広さと、ただ面白い・珍しいといった点だけでは選ばれないクオリティーの高い作品がそろっている点が出品者を奮い立たせる公募展です。

個人的にも星野眞吾賞展は関わりが深く、また思い入れも強い公募展です。様々な理由がありますがその一つに前回の入賞者、漆原夏樹さんの存在があります。漆原さんは私の予備校時代の講師であり、私が日本画を描ききっかけを作った恩師です。前回は私は出品しており、出すからには賞を、という

意気込みで取り組みましたが結果は入選。後日公式発表で大賞作品を見て驚きました。同時に非常に嬉しかった。しかしながら、それと同じくらい、いやそれ以上に悔しかった。身近な方であるだけ本当に悔しかったです。(それは今回準大賞である漆原さんの奥さんである中澤さんは私以上の悔しさだったと思いますが…) その悔しさは確かに今回の結果に結びついていると思います。

また最後に授賞式やギャラリートークで感じたことですが、この展示の非常に素晴らしい点である「豊橋市の皆様から愛され、支えられていること」を忘れてはなりません。作家はどんなにいい作品を描いても見てもらえなければその価値は見出されません。そういった面でもこの公募展の存在の重要性を感じます。

様々な面で優れた星野眞吾賞展が今後も長く続くことを願い、今回の受賞を糧に私は良い作品を描き続けます。

財田翔悟 (たからだ・しょうご)

1986年神奈川県生まれ。東北芸術工科大学大学院修了。2014年「美術新人賞デビュー2014」グランプリ受賞。同年「TERADA ART AWARD2014」にて優秀賞「立高恵賞」受賞。「トリエンナーレ豊橋 星野眞吾賞展」には2011年から出品・入選し、3度目の挑戦となる第7回展で星野眞吾賞(大賞)を受賞。その他個展、グループ展多数。



第7回星野眞吾賞《かさねがさね》



友から友へ

会員みなさんに美術との関わりについてご寄稿いただきました。

私と美術

水藤之資 (2)



今年で54回目の誕生日を迎えます。いきなりこんなことを書くのはこの企画に相応しくないかもしれませんが、この54年間、美術(品)を觀賞するために意図して美術館などへ足を運んだことはありません。勿論、何かのタイミングで誘われて〇〇展などに足を運ぶということはありませんし、絵を見たり、美術品を見たりすることもどちらかと言えば好きな方だと思います。何故なのか。今回投稿に当たり幼少期から美術的なものにどう触れていたのか振り返ってみました。

幼少期、父親の実家の魚屋で過ごす時間が多かったのですが、そこにはなぜか美術の図鑑のようなものがあり、引っ張り出しては眺めていた記憶があります。今でも記憶にあるのは色鮮やかなゴーギャンくらいですが、ほかに川での石拾い。きれいな模様の石を探して拾ってきた記憶があります。そして父と父の友人が神社・仏閣巡りをするのについて行ったことも思い出しました。小学生になる頃から嵩山町に住

むようになりました。周りを山に囲まれておりましたので、休みの日には近くの山に大人について入り、四季の移り変わりを間近に感じたりすることも度々ありました。

中学生以降では、家にあった一眼レフカメラで写真を撮ったり、父の趣味だった焼き物を日常的に使っていました。また、いたずら書き程度に絵を描くことはしていましたが、自ら学ぼうとしたことはありませんでした。

美術館などへ足を運ばない家庭環境で育った結果、以降今日に至るまで自らが意図して美術館などに足を運んだことがない、という状況であることが改めて分かりました。私の中では美術館などにあるものではなく、生活の中で触れるものが美術的なもの、つまり身近でちょっとした感動を与えてくれるものを美術的なものとして54年間過ごしてきた、ということのようです。今更美術を学ぶのも大変ですので、今後は「身近にある『豊橋市美術博物館』に足を運ぶ」ことを生活の一部にして美術に触れていきたいと思います。

◆ご自宅に飾ってある、お気に入りの作品との一枚です。

美術館と私

高倉一代 (13)



子どものころから現在に至るまで、絵を描くことは大の苦手です。そんなこともあり学生時代は美術にあまり興味なく生活していました。

そんな私が美術館に行くようになったのは結婚してからです。主人の影響もあり、特に子どもが成長し、時間的にも余裕ができたころからで、主人と行ったり友人と行ったり、一人でのんびり気ままに行ったりと楽しんでいます。

よく行く美術館は、豊橋市美術博物館、名古屋市のポストン美術館、愛知県美術館、名古屋市美術館、東京に行った時には東京都美術館、国立西洋美術館、国立新美術館、三菱一号館美術館などに展示に関係なくよく行っています。なかでも三菱

一号館は、建物や展示場、周囲の雰囲気など気に入っています。美術鑑賞のあと、かつて銀行営業室として利用されていた場所を復元したカフェでのんびりランチやお茶をするのも楽しみの一つです。

また友の会のバス旅行に参加した時に、各地の美術館に連れて行っていただきました。海外に行った時も美術館に行くのを楽しみにしてきました。ニューヨークのメトロポリタン美術館に行った時、フェルメールの展示してある部屋に入っても数名しかいなくて、五点をゆっくり鑑賞することができ感激したことを思い出します。

今は、これまでにいく機会を逸していた足立美術館に行ってみたくと思っています。近いうちに行くことができれば幸せです。

豊橋市美術博物館友の会賛助会員 (前号発行後、ご加入・ご継続いただいた会員)

友の会活動にご支援をいただき、ありがとうございます。

(株)イクモ / イノチオホールディングス(株) / サラフィナンシャルサービス(株) / 有楽製菓(株) 豊橋夢工場 / (有)若松園

(50音順・敬称略 平成29年9月末現在95社)

松本零士トークショー 9月2日(土) 午後2時～ 講義室

漫画家は徹夜して仕事をするのが当たり前の職業です。週刊誌の連載が始まると編集者は朝原稿を取りに来ます。実は、昨日から一睡もしていません。体力はまだあります。

私が少年のころは戦争で食糧が不足していました。一食は茶碗の中にお米が10粒しか入っていないおかゆ。そのせいで背は伸びなかった。けれど、木に登ったり、池で泳いだりして暴れたおかげで体力は付きました。ただ、肋骨は6本折っています。

父が趣味で映写機を持っていて、小さいころからディズニーのアニメをみたりして影響を受けました。1953年15歳で漫画少年(学童社)に『蜜蜂の冒険』が掲載されました。以来、漫画家として今までやってきました。私の本名は晟(あきら)ですが、だれも読めないのを、零(終わらな)士(さむらい)をペンネームとしました。

東京へ出て、本郷3丁目の山越館に住んでいました。

編集者から「連載打ち切り」とか「こんなバカな漫画を描くな」と言われ貧しい生活をしていました。風呂にも入れず、インキンタムシにかかり、『男おいどん』

の中に治療薬をしっかり描きました。漫画映画を作るのが夢でした。音楽家にも支えられました。『宇宙戦艦ヤマト』を作ったとき、ベートーベンの9番と言ったら、そのイメージで作曲してくれました。漫画家は目的意識をもって描かないと意味がありません。私は皆さんに読んでほしい漫画を描いています。絵は私の心を描いています。終わらなきさむらいという名前なのでこれからも頑張ります。



“信念に殉じた男の生涯には後悔という言葉はない” ～メーテル [銀河鉄道999・空間無軌道] ～ (高須博久・記)

松本零士展で野外コンサート

10月1日(日) 午後1時～

「漫画界のレジェンド 松本零士展」の開催を記念して、10月1日に豊橋交響楽団によるミュージアム・コンサートが開かれました。昨年新設された北庭を初めて使用した催しです。クラリネットや金管楽器のアンサンブルで、松本零士作品「銀河鉄道999」や「宇宙戦艦ヤマト」のテーマ曲、宇宙にちなんだ楽曲など9曲が披露され、来場者350人は野外に響く音色に熱心に耳を傾けました。



美術博物館北庭で開催された演奏会

中村正義の世界への道しるべ (書評)

権威に逆らい、病魔に抗い、既成概念を破壊しつつ描いたのは、ネオンカラーの着物をまとい虚ろな目をむける舞妓たち、醜悪さが匂いたつ人物群像、豪華さと儂さがたどる《源平海戦絵巻》、かと思うと、当館寄託の《夕陽》のように穏やかな風景画……中村正義は、あまりに巨大で多様で非凡。どう捉えたらいいのか、とまどってしまう。しかし、気になる。

そんな中村正義への理解を助ける本をご紹介します。今年8月に刊行された『中村正義の世界』大塚信一著 集英社新書ヴィジュアル版。

サブタイトルに“反抗と祈りの日本画”、帯に“画壇のエリートはなぜ異形の舞妓を描いたのか?”とあるように、おそらく筆者(元・岩波書店編集者、社長)も正義から強い印象と磁力を感じたのだろう。

第一部「正義の生涯」では、彼を取り巻く人間関係、画壇や社会事象などを紐解きながら正義の本質に迫る。続く第二部「中村正義の絵画、その秘密」では、膨大な作品群を舞妓・仏画と風景画・顔の三章に分け、他の画家との対比や表現の変遷をたどりつつ、正義の芯にある精神性、宗教性を多角的に解き明かした一冊。豊富な図版も嬉しい。お薦めです。

(神野志保子)



224頁/1,400円+税

収蔵品紹介

往来物合本と手習手本

江戸時代 版本・写本 21.2×14.8 / 29.0×20.0cm 森田家文書

寺子屋は江戸時代の庶民の教育機関で、読書・習字・珠算などを教えていましたが、その中心は習字でした。生徒は筆子などと呼ばれ、大津村の大雲寺の例では9歳か11歳に入門して、3年から6年くらい在籍する子が多かったようです。「近世豊橋地方寺子屋一覧」(『豊橋市史第2巻』)によれば、豊橋地域の寺子屋数は延べ196ヶ所、僧侶の経営が約半数を占めました。当地方に本格的に普及しはじめる文政年間以降、農民を師匠としたものが増えていきました。ほかにも武士・商人・神官・医者などが開設しています。明治6年(1873)頃には地域に学校ができて寺子屋は廃止されていきました。

この資料は、牟呂八幡宮の宮司森田光尋の寺子屋で使われていた教科書です。小さい方は師匠の控えと思われる。前半は牟呂村内の字名、渥美・宝飯・八名三郡の村名を列挙した「三河国三郡之村号」、東海道五十三次の宿場名、三河国など国名・官職名・苗字や、筆子の心得を七五調の文にした「是非短歌」など、後半は地理をあつかった「都往来」「芳野往来」、商売に必要な文字を学習する「商売往来」、手紙の例文「風月往来」など版本往来物が綴られています。「いろは」からはじめて、これらの文字を一通り学習することで、日用の文字はある程度覚えることができたものと思われる。「商売往

来」の魚類名が挙げられた箇所欄外に「鯛(あさり)」を書き足しているのは、三河湾に面した牟呂村らしい補足でしょう。



大ぶりの資料は、控えの中から師匠が書き写して森田梅尾に与えた手本です。何日かに一回渡される半紙の手本を一冊にまとめたもので、筆子は手本を横に置いてくりかえし習字をしました。各頁に飛び散った墨のあとがその様子を伝えています。控えのすべてが写されているわけではなく、版本往来物では「都往来」と「商売往来」だけが綴じられています。基本的な学習が終わると、筆子の興味や必要に応じてテキストを選んだのでしょう。この本の最後には、慶応2年(1866)から慶応4年(1868)までの書初の手本が綴られていますので、この85枚が2~3年の間に学習した分量を示しているのかもしれませんが。今の小学校と比べるといささかのんびりしたペースで、渡辺崋山が描いた《一掃百態図》の寺子屋の様子が偲ばれます。

(学芸専門員 増山真一郎)

◆豊橋の寺子屋展にて公開

編集後記

今、「写実」が「旬」かなと思います。碧南市藤井達吉現代美術館で開催された「リアルのゆくえ」も賑わっていたようです。「写実」も伝統的な「写実」から現代の「写実」まで、表現が随分変化してきています。現代の写実作品を見ると、「写実だからこそ表現できる大いなる虚構」のようなものを感じます。星野眞吾大賞を受賞なさった財田氏の作品も、写実的です。しかし、現実にはありえない表現をなさっています。その怪しげなところに何とも言えない魅力を感じます。「ニッポンの写実 そっくりの魔力」が、待ち遠しいです。どのような魔力を繰り広げてくれるのでしょうか。大虚構を見破るのも楽しいです。大虚構にすっかり騙されるのも楽しいです。

(藤本逸子)

【表紙作品】

野田弘志《黒い風景 其の参》(部分) 1973(昭和48)年
油彩、キャンバス 145.5×112.1cm 豊橋市美術博物館蔵

◆「ニッポンの写実 そっくりの魔力」展にて公開中

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第99号

編集・発行 豊橋市美術博物館友の会
会 長 宮田正人
編 集 長 高須博久(副会長)
編集委員 鈴木冷子 神野志保子 河邊清江 藤本逸子
清水貴裕 高倉一代 久曾神真喜
協 力 豊橋市美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1 TEL.0532-51-2882
平成29年10月15日発行